

研究課題	「探究的な学び」と「ICTを活用した個別最適化した学び」は全日 制課程の新たな扉を開くことができるのか
副題	iPad を用い、一律一様の学びから脱却することで、自己肯定感の 向上と学ぶことへの情熱は生まれるのか
キーワード	不登校、中途退学、探究的な学び、個別最適化した学び、自己肯定感
学校/団体名	私立学校法人和歌山信愛女学院和歌山信愛中学校高等学校
所在地	〒640-8151 和歌山県和歌山市屋形町 2-23
ホームページ	https://shin-ai.ac.jp/

1. 研究の背景

近年、全日制課程の高等学校においては学業への不適応や人間関係のトラブルによって自らを卑下し、自己肯定感の低下した生徒が一定数存在している。これまでは適応できない生徒側に原因があるという認識が根強くあり、それが不登校や中退という残念な結果につながっていた。文部科学省の調査では、令和4年度には全日制課程の高等学校には不登校者が6万人以上、中途退学者が4.3万人以上も存在していることが明らかになっている。教科学習に優れ、テストで高得点を収めることが学校生活の中で何よりも素晴らしいという価値観が崩れた今だからこそ、在籍を希望しながらも去らざるを得ない生徒を生み出し続ける全日制課程の固定化した価値観を打破し、多様な生徒を受け入れることのできる全日制課程のあり方について模索することには大きな意義があるのではないかと感じている。

一方で、女子中高一貫校である本学も、保護者や地域の要請もあり、都市部にある有名難関大学への進学を期待され、中学入学段階から質量ともに充実した学習環境を提供している。この環境に適応できた生徒たちは高校卒業段階で大きく学力を伸ばし、難関大学へと進学していく。しかし、中学2年生から学力別のクラス編成が行われることもあり、前向きな気持ちで入学したにも関わらず、この環境に適応できなかった一部の生徒たちが、自ら「できない生徒」というレッテルを貼り、その日々が続くことで学校生活を楽しくないと感じ、不登校や中退という悲しい結果につながってしまっていた。そこで、2022年度の中学3年生（現高校2年生）からそのような生徒を一つのクラスに集め、「i（アイ）コース」と名づけ、本研究課題に取り組むこととした。

2. 研究の目的

以上のことから、本研究では、そのような生徒たちとともに「**個人の興味関心を重視し、チャレンジとアクションを伴う探究的な学び**」を実行し、学ぶことの楽しさを体感することで、自己肯定感が回復し、「**ICTを活用した個別最適化した学び**」を通して、新たに見つけた夢や目標の実現を目指す前向きな姿勢を取り戻すことにつながっていくということを明らかにしたい（図1）。

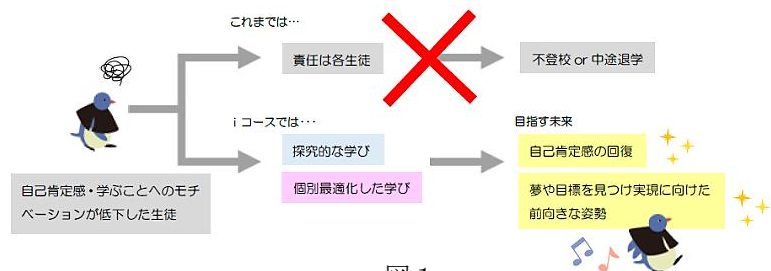


図1

また、前述の通り、iコースに在籍しているような生徒は、他の全日制課程の高等学校にも存在しており、年間10万人以上にもおよぶ不登校、中退者を生み出し続けている。一概に通信制や定時制課程等を否定するわけではないが、今や全日制課程に魅力を感じることができず、最初からそれらを選ぶ生徒たちも増えてきた。しかし、学校とは学力だけを身につける場所ではなく、人間関係の構築や継続、基本的な生活リズムの確立など様々なことを身につける場所という側面も有しているはずだ。近年の日本は他者の失敗や挫折に対して寛容ではない印象を受ける。本学のチャレンジが他校において新たな価値観を構築し、一人でも多くの生徒が全日制課程において生き生きとした学校生活を送ることにつながることを願うものである。

なお、本学は近年少子化の影響もあり、入学者が減少し、20名以下の少人数でクラス運営を行うiコースを維持する体力がなくなり、現高校1年生の2期生の卒業とともにiコースを閉鎖することが決定した。1期生となる高校2年生にはすでに3年近くに及ぶiコースの取り組みを通して明らかな変化が見えはじめている。本学でこの学びの芽をさらに育てていくことができないことには悔いは残るが、他校における学びのモデルとして広がっていくことを期待したい。

3. 研究の経過

iコースは、1期生高校2年生19名、2期生高校1年生12名で編成されている。2022年度の中学3年次から本取り組みは順次実施しており、今年度も4月より継続実施している。今年度は1期生である高校2年生が文理選択を終え、本研究の2つ目の学びの柱である「ICTを活用した個別最適化した学び」をスタートさせたため、1期生を対象として報告を行う。

表1 2022年、2023年の研究・実践内容

①年度	②月	③取り組みの内容・方法
2022年度	4	・「探究的な学び（週4コマ）」の開始 ※以降（探）
	6	（探）株式会社マイナビ「Locus」の協働開発のための授業①実施
	7	（探）株式会社マイナビ「Locus」の協働開発のための授業②実施
	9	（探）和歌山地方法務局とのコラボ企画：課題提示および講義 「相続登記の義務化をいかに多くの人々に告知するか」
	11	（探）和歌山地方法務局とのコラボ企画発表会
	1	（探）多文化共生講座（和歌山市役所）実施
	2	（探）株式会社マイナビ「Locus」の協働開発のための授業③実施
2023年度	4	・「探究的な学び（週4コマ）」の開始 （探）探究テーマの設定と探究学習のスタート
		・「個別最適化した学び」リフレクションタイム（週1単位） ※以降（個） （個）次年度からの「スタディサプリ」本格使用に向けた準備として
	5	（個）「到達度テスト春」の受験
	7	（探）探究コーディネーターへの探究的な学びの進捗状況報告会①実施
	10	（探）第一精工舎とのコラボ企画：課題提示および講義
	11	（個）「到達度テスト秋」の受験
	1	（探）第一精工舎とのコラボ企画：アイデア提示
3	（探）探究コーディネーターへの探究的な学びの進捗状況報告会②実施	

表2 2024年度の研究・実施内容

①時期	②取り組みの内容	③評価のための記録
4	・「探究的な学び（週3コマ）」の開始 （探）自ら設定した探究テーマへの研究活動継続実施 （探）主体的な各種探究コンテストへの応募 ・「個別最適化した学び」自由選択科目の開始 （個）スタディサプリを用いて、3科目6単位を自由選択	
5	（探）本学オープンキャンパスにて独自企画の実施 （個）1科目で中間考査の実施	
6	（個）「到達度テスト春」の受験	
7	（個）3科目で期末考査の実施 （探）探究コーディネーターへの進捗状況報告会①実施	アンケート調査（生徒） アンケート調査（生徒）
8	（探）自分で創るフィールドワーク実施（成功者のみ） 【教員】大阪大学「探究の実践に学ぶ2024」にて実践報告	インタビュー調査（対象生徒）
10	（個）1科目で中間考査の実施	
11	（探）アドベンチャーワールド「ドリームデイ・アット・ザ・ズー」への参加 （個）「活用度テスト秋」の受験	
12	（探）3科目で期末考査の実施 （探）和歌山県データ利活用コンペ最終審査会への参加	アンケート調査（生徒） インタビュー調査（対象生徒）
2	（探）「高校生RingAWARD2024」への参加 （探）「MY PROJECT AWARD2024」オンラインSummitへの参加	インタビュー調査（対象生徒） インタビュー調査（対象生徒）
3	（個）2科目で学年末考査の実施 （探）探究コーディネーターへの進捗状況報告会②実施 （個）「到達度テスト秋」の受験	アンケート調査（生徒） アンケート調査（生徒）

※（探）：「個人の興味関心を重視し、チャレンジとアクションを伴う探究的な学び」の取り組み
 （個）：「ICTを活用した個別最適化した学び」の取り組み

4. 代表的な実践

① 「個人の興味関心を重視し、チャレンジとアクションを伴う探究的な学び」

総合的な探究の時間（週3コマ）を中心として

a 概要

今年度1期生である高校2年生は、月曜5限・火曜6限・木曜6限の週3コマを使い探究的な学びを実施した。19名それぞれが「興味関心」×「社会・学術的な課題」をテーマに課題設定を行い、生徒自らが外部機関に連携を依頼するなど「アクション」と「チャレンジ」を重視した。

b 主な設定テーマ

- ・美と倫理の融合、次世代メイクブラシ
- ・廃棄されてしまう規格外みかんを有効活用して、地域活性化にもつなげよう
- ・音楽を聴きながら勉強するのは本当によくないのか
- ・小学校の情報教育をさらに充実させることはできないのか
- ・アサリを食害するツメタガイの活用法 など

c 「自分で創るフィールドワーク」

自らの探究テーマについて学びを深めていくために、有識者からのアドバイスや指導をいただくなど自分たちで折衝し、フィールドワーク先を確保するという活動で、今年度初めて実施し

た。なお、今年度は5名の生徒が折衝に成功した。特に、株式会社 JINS への訪問が認められた生徒は、集中力を測定できるメガネ「JINS MEME」の貸与だけでなく、開発チームからその構造や適切な使用法を学んだ（写真1）。さらに、ICTを活用して基礎学力の確かな定着を支援することを旨とする LINES 株式会社への訪問を認められた生徒は、エンジニアの方にソフトの作成方法やプログラミングの基本を指導していただいた（写真2）。



写真1



写真2

なお、探究的な学びにおいては、情報の収集、分析、まとめ・表現などあらゆる場面において iPad を活用している。

d 進捗状況報告会（年2回）

株式会社マイナビの田中えり様に探究アドバイザーを務めていただき、年間2回、探究的な学びの進捗状況の報告会を実施している。生徒たちとは中学3年生段階からのご縁で、毎回適切なフィードバックとともに、生徒たちのやる気を促進するような関わりをしていただいている。なお、今年度3月報告会は、田中様自身が産休・育休期間に入ったことから同じマイナビの男性社員の方に代役を務めていただくことになった。探究的な学びの進捗状況に自信を持ちつつある生徒も多く、新たな担当者への報告はかえってよい機会となった。

② 「ICTを活用した個別最適化した学び」

自由選択科目Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（各2単位×3科目）を中心に

a 概要

探究的な学びを通して、少しずつ自らに対して自信を取り戻してきた生徒たちが新たに描いた夢を実現へと導くために、株式会社リクルート「スタディサプリ」を用いて文系理系にとらわれず、個別最適化した学びとして自由な科目選択を可能としている。なお、iPadを用いて学習を行い、動画授業で理解しきれない場合は、各授業の担当教員が、生徒の質問に対応することになっている。



写真3

b 選択の例 ※（ ）中は選択者数

- ・地学基礎（1）…本校では未開講科目である
- ・専門生物（2）…本校では理系を選択する特進コースの生徒が受講可能である
- ・数学ⅡBC（1）…本校ではiコースに相当する生徒は私立文系を選択することを推奨している
- ・世界史探究（1）…本校では「日本史探究」の選択を推奨している

c 定期考査の実施

数学は、他の科目と同様に年間5回の定期考査を実施。理・社に関しては学期末考査のみの実施。また、学び直しとして履修済の科目を選択した場合は、レポートでの評価を行っている。

③ その他

a 各種の外部コンテストへの主体的なチャレンジ【探究】

b 小テストの合格点自己設定（学年一律の合格点を押し付けるのではなく、自分が努力した上でクリアできるという合格点を自ら設定する。ロイロノートを用いて事前提出）【個別】

c タスク管理表（日々の取り組むべきことをピックアップし、振り返りの記入。毎朝提出し、担任が確認、コメントすることで信頼関係の構築を目指す）の実施【個別】

5. 研究の成果

① 「個人の興味関心を重視し、チャレンジとアクションを伴う探究的な学び」

すでに取り組んで3年目ということも関係しているのか、今年度の後半には目に見える大きな成果が立て続けに出ている。

・各種コンテストでの表彰・結果

a 12月第8回和歌山県データ利活用コンペティション「2040年頃の理想のまち」

日本生命賞受賞 ※i コースの5名でチームを編成し応募

b 12月株式会社リクルート「高校生 Ring2024」

セミファイナリストへの選出（写真4）

※セミファイナリスト30名の中の1人として選ばれる

c 1月認定NPO法人カタリバ主催「MY PROJECT AWARD 2024」

オンライン Summit への参加 ※3名が書類審査を通過

d 2月一般社団法人未来教育推進機構主催「SDGs 探究 AWARD 2024」

企画、アイデア部門優秀賞受賞

※i コースの2名がチームを編成し応募



写真4

その他、「STARTER PROGRAM U18-LAB.」など各種の外部プログラムにも積極的に参加する生徒が出ている。また、年間3回実施したアンケートからも生徒たちが探究的な学びを通して、自分に対して再び自信を持ち、学ぶことへの情熱が回復しつつある様子が伺える（表3）。

また、aの受賞生徒へのインタビューからは「当日はとても緊張したが、心から参加してよかったと思っている。これまであまり認められた経験がなかったので、評価してもらえたことがとてもうれしい」、

「探究に取り組んできて

よかったと思った。

今回、お年寄りと若

者世代が互いに助

け合う未来のまち

	①探究的な学びに取り組むことで「学ぶこと」に対する情熱が向上しているを感じる。			②探究的な学びに取り組むことで少しずつ自分に対して自信が持てるようになっている。			
	8月	12月	3月	8月	12月	3月	
とても感じている	4人	3人	4人	とても感じている	3人	3人	8人
まずまず感じている	5人	12人	13人	まずまず感じている	7人	9人	5人
あまり感じていない	8人	4人	2人	あまり感じていない	6人	7人	6人
全く感じていない	2人	0人	0人	全く感じていない	3人	0人	0人

表3

を提案したが、高齢者が増えるこれからの社会について考える機会となり、自分がどのような形なら貢献できるかなと考えている」、またbで選出された生徒は「自分なりに興味や関心をもって取り組んだ探究活動が評価されてうれしい。ただ、ファイナリスト5名の中に選ばれなかったことはとても悔しい。AWARDの終了後にリクルートの社員さんとお話する機会があり、あともう一步でファイナリストだったことを知り、さらに悔しくなった。来年は高3になるが、受験勉強と両立させながらこの活動を続け、次年度ファイナリストに選ばれたい」と述べている。また、

1月上旬に実施したa・b該当生徒以外13名を対象に実施したアンケートからも他の生徒に対してプラスの影響を与えていることが確認できた(表4)。

さらに、2月末締め切りであった「ごみ削減アイデアコンテスト」に5組11名が応募するなど実際のアクションにもつながっている。

①表彰された生徒たちから刺激を受けた	
とても刺激を受けた	12人
まあ刺激を受けた	1人
②自分も今後は積極的にコンテスト等に参加したいと思うようになった。	
とてもなった	11人
少しなった	2人

表4

② 「ICTを活用した個別最適化した学び」

一方こちらは今年度から本格的に開始したこともあり、動画教材を活用しながら授業を展開していくことは決定していたが、テストの作成および評価の方法、動画教材で理解しきれない場合のフォローなど試行錯誤の一年であった。今年度の終わりを迎えて、特に内容的に最も難しいと考えられる「数学ⅡBC」を担当した教員は「**動画教材だけでこれだけ学習が進むということに驚きを感じる**」というコメントを残しており、一定の成果を得られたと考えている。

また生徒たちへのアンケート結果からも時間を追うごとに少しずつ対応できている様子が見え、探求的な学びを通して見つけた夢や目標を実現するために前向きに活用している姿を見ることができる(表5)。

さらに、たった1名ではあるが、本来選択できなかった理系科目である「専門生物」を選択した生徒は「今まで学校の授業がおもしろ

①iPadを用いて自由に選択できる自由選択科目Ⅰ・Ⅱ・Ⅲについて	8月	12月	3月
自由に科目を選ぶことができ、楽しく学ぶことができている	4人	5人	7人
自由に科目を選ぶことができ、まずまず楽しく学ぶことができている	3人	13人	12人
自由に科目を選ぶことができたが、あまり楽しく学べていない	9人	1人	0人
自由に科目を選ぶことができたが、全く楽しく学べていない	3人	0人	0人
②期末テストを終えての気持ちとして近いものを答えなさい。	8月	12月	3月
自分のペースで学ぶことができ、難しいところもあったが習得できている	3人	6人	5人
自分のペースで学ぶことができているが、習得できていないところがある	8人	13人	14人
自分のペースで学べていないが、ほぼ習得できている	5人	0人	0人
自分のペースで学べていないし、あまり習得もできていない	3人	0人	0人
③自らの夢や目標の実現に向けて順調に活用できていると思うか	8月	12月	3月
できている	1人	3人	4人
まあできている	2人	4人	6人
あまりできていない	8人	3人	6人
できていない	7人	4人	0人
分からない	1人	4人	3人

表5

いと感じたことがなかった。しかし、専門生物はとても興味深く学んでいる。これまでは難しくなったらやる気がなくなったが、何度でも見直せるので、粘り強く取り組んでいる。今まで考えたこともなかったが、大学で生物を学んでみたいと思うようになった」と述べており、自由な選択の新たな可能性を感じる事ができた。

その上で、本研究の目的の1つである生徒たちの自己肯定感の回復状況について報告していきたい。ただし、本研究のスタートは2022年4月であり、その段階では現在のように助成等を受けていなかったため、スタート段階での自己肯定感の状況は測定していない。ただし、最初のHRの第一声が「先生、私たちってバカクラスなんやろ？」であったことは現在に至るまで忘れたことはなく、その当時自己肯定感が高かったとは思えない。また、自己肯定感の測定に関しては様々な方法があるようではあるが、「Rosenberg 自尊感情尺度の信頼性および妥当性の検討」(2010 内田、上埜) および NPO カタリバ「自己肯定感を診断できるチェック法」の記事より

Mimura & Griffithhs によって発表された日本版 RSES が信頼性・妥当性の高い自己肯定感チェックリストとして用いられていることが判明したため、これを用いてチェックを行った。ちなみに、右にあげる10の質問項目(表6)に対して回答者が1～4点に相当する4段階で答え、40点満点で評価を行う。25点を健常者の平均とし、20点以下が低い、30点以上を高いとしている。

質問項目
①私は、自分自身にだいたい満足している。
②時々、自分はまったくダメだと思うことがある。
③私にはけっこう長所があると感じている。
④私は、他の大半の人と同じくらいに物事がこなせる。
⑤私には誇れるものが大してないと感じている。
⑥時々、自分は役に立たないと強く感じることもある。
⑦自分は少なくとも他の人と同じくらいの価値のある人間だと感じている。
⑧自分のことをもう少し尊敬できたらいいと思う。
⑨よく、私は落ちこぼれだと思ってしまう。
⑩私は、自分のことを前向きに考えている。

表6 「Mimura & Griffith 日本版 RSES チェックリスト」

なお、今年度は8月、12月、3月の3回にわたって測定し、その結果を右の表にまとめた(表7)。前述の通り、すでに取り組み3年目であることもあるためか、クラス平均値は8月段階ですでに健常者の平均値と言われる25点に届こうとしている。

	8月	12月	3月
平均値	24.3	23.9	26.2
30点以上	3人	2人	2人
20点以下	2人	2人	1人
前回からの上昇者		9人	10人
前回からの下降者		5人	7人

表7

ただし、「探究的な学び」で各種コンテストにおいて表彰を受けた8名のうち7名は数値が上昇(1名は変化なし)、また「個別最適化した学び」において学びたいと思える科目に出会った1名の生徒もともに数値が上昇していることが確認できた。以上のことから本取り組みが、生徒たちの自己肯定感の回復及び向上に寄与していることは間違いない。

また、本報告書ではその詳細にまで触れることはできなかったが、小テストの合格点の自己決定においても少ない労力で合格しようとする生徒も見られるものの、得意教科においては学年設定の合格点よりも高い得点もしくは満点といった設定をする生徒の姿も少数ではあるが見られている。これも「個別最適化の学び」が生み出した効果であると考えている。

6. 今後の課題・展望

次年度はiコース1期生が高校3年生に、2期生が高校2年生となる。2期生も本格的に「個別最適化した学び」の実践段階となるが、1期生には、ICT機器を活用した個別の学びについては無事に実施することができたものの、「すでに単位を取得している科目の学び直しに関してはテストがなく、真剣に学んでいるとは言えない」「学び直しと言いながらもレポートで評価が決

まってしまうので、苦手な科目を選んで視聴していない」のように、現行システムを逆手に取った意見も見られており、模擬試験等を活用しながら明確な目標設定を行うなど、より細やかなサポートを行い、「最適化」に向け更なる改善の余地を感じている。

一方、「探究的な学び」においては、ICT 機器や ICT 環境を活用しながら、調査、外部との連携、資料作成など有効な学びを実践することができた。しかし、順調に進んでいる生徒と進んでいない生徒における「自己肯定感の数値における差」は大きな課題だと感じている。幸か不幸か年度の後半になって、外部からの評価を得た生徒が全体の半数近くにもものぼり、現在も増え続けている。もちろん本人の探究的な学びに対する取り組みの熱量も少なからず関係しているのだが、「自らの興味関心を深める探究的な学び」、「自らの興味とスモールステップを重視する個別最適化した学び」という新たな活躍の場を得て、そこでの成果を自らの自信としながら再び夢や希望を抱き、新たに設定した目標の実現に対しての情熱を取り戻すという本研究においても「他者との比較」がネックとなったことで、新たな視点を提供されたように思う。外部からの評価を調整することはできないため、今後は担当教員のより「個」を踏まえた対応が求められる。

7. おわりに

本研究では、前述した2つの取り組みを通して、生徒たちの「自己肯定感の回復」と「学ぶことへの情熱を取り戻す」という目標をある程度クリアすることができた。1期生は高校3年生への進級を目前に控え、いよいよ希望進路の実現に向けて真剣に取り組む段階へと歩みを進めることになる。しかし、最新の模擬試験における英国数主要3教科のiコース在籍生19名の平均偏差値は39.3と今後学力的には苦戦が予想される。しかし、このような生徒たちが学校生活を「楽しい」、「充実している」と感じることができ、**長期欠席者、不登校者、中途退学者が1人も存在しないクラス**には一定以上の存在意義を認めることができるのではないだろうか。また次年度からは、iコースの学びを求めて新たに1名の生徒が編入することも決定している。本学としては2期生の卒業とともに本コースの取り組みは終わりを迎えるが、この学びの芽が他校へと広がっていくことを強く願っている。

8. 参考文献

- ・ 認定 NPO 法人カタリバ.2018.「KATARIBA マガジン」
<https://www.katariba.or.jp/news/2018/08/15/11856/>
- ・ 内田知宏、上埜高志.2010.「Rosenberg 自尊感情尺度の信頼性および妥当性の検討 -Mimura & Griffiths 訳の日本語版を用いて-」東北大学大学院教育学研究科研究年報、第 58 集・第 2 号
- ・ 一般財団法人社会的インパクト・マネジメント・イニシアチブ.2020.「アウトカム・指標・測定方法の選定」
https://simi.or.jp/outcome_indicators/education1-17
- ・ 櫻井茂男 (2020)『学びの「エンゲージメント」主体的に学習に取む態度の評価と育て方』図書文化社